

歌ことばとしての複合動詞の生成 ——「扱き入る」「扱き混ず」を中心に——

山下 文

公立千歳科学技術大学理工学部共通教育科

*

1. はじめに

本稿は、奈良・平安時代の和歌に見られる複合動詞——「動詞連用形+動詞」の形態を取る表現——の中でも、「扱く」を第一項に取るもの（以下、「扱き+V」と示す）を取り上げ、和歌表現の生成と展開を論じるものである。和歌文学研究の方面からは複合動詞はあまり着目されてこなかった。歌語辞典の掲出語に占める複合動詞の少なさがそれを物語っている。例えば、片桐洋一『歌枕歌ことば辞典 増訂版』では見出し語として取り上げられる約830語のうち、複合動詞は「後先立つ」「搔曇る」「搔暗す」「消返る」の4例に留まる¹。しかし、伊藤博が『万葉集』中の複合動詞の中に文学的物言いを表すものがあると指摘するように²、複合動詞も文芸作品としての和歌の一端を担う表現だと言えよう³。

本稿では「扱き入る」と「扱き混ず」に着目し、和歌文学研究の立場からの歌ことばとしての分析を試みる。その上で、古典文学作品に見出される複合動詞の生成過程に、歌ことばとしての特質が大きく影響を及ぼしていることを明らかにしたい。本稿に例示する用例には①から⑤の通し番号を付した。重複する例については同一の番号を付している。

2. 単純動詞としての「扱く」

本章では、「扱き+V」を取り上げる前段階として、単純動詞「扱く」の意味と用法を論じる。単純動詞「扱く」の最も古い用例として挙げられるのは、昌泰年間(898-901)に成立した『新撰字鏡』の和訓である。巻第十二・諸食物調饌章に「榊稻／伊祢古久」とあり、稻について「扱く」が使われていたことが分かる。また、いささか時代は下がるが、十二世紀後半に成立した観智院本『類聚名義抄』には、七掲出字(搦・撻・擺・揃・擢・搆・采)に「扱く」に相当する訓が見られる。これらは全て「手」の項目下にあり、「扱く」が人の動作を表すものであることを物語っている。特に「搦」「揃」「采」は「コク 木葉」「コク 桑」のように和訓が示されており、「扱く」と木葉・桑が、共起しやすい語の関係にあったことがうかがわれる。

¹ 久保田淳・馬場あき子編(1999)『歌ことば歌枕大辞典』では2826項目中51例である。

² 伊藤博(1976)「万葉集と歌語」307~313頁参照。伊藤氏は「咲き散る」「出で立つ」「折りかざす」の3種類の「動詞連用形+動詞」型の複合動詞を取り上げ、それらを和歌における美意識を表すものであると指摘している。

³ なお、百留康晴氏には万葉集に見える複合動詞の形態を取る表現に着目し、複合動詞の成立に和歌が詠出された場との関連を見いだそうとする論考がある(百留康晴(2020)「日本語複合動詞の発生史について」)。これは、日本語学の観点から分析したものであるためここでは先行論として触れず、最終章において取り上げた。また、本稿とは研究の目的や方針が異なるが、神谷かをる(1999:初出1996)「複合動詞」、糸井通浩(2018:初出1993)「かな散文と和歌表現—発想・表現の位相」などは、平安時代の和歌に見える複合動詞を研究の俎上に置いたものと言える。

次に、和歌集以外の和文資料に見える「扱く」の意味と用法を確認する。単純動詞「扱く」の用例は奈良時代の作品・文献には見当たらない。また、平安時代の文献にも単純動詞の形での用例は非常に少なく、『宇津保物語』と『枕草子』にそれぞれ1例ずつ見出されるのみである。

①(前略)沈の御衣箱、黄金の置口したる六つに、賭物、女の装ひ一具、白き桂十襲、袴十具、蒔絵の御衣櫃に入れて、もの五斗ばかり入るばかりの紫檀の櫃五つに、碁手こきてかさ高く入れたる、すみ物とてうち具したまへり。『宇津保物語』蔵開上

②(高階明順は)稲といふものを取り出でて、(中略)五、六人して扱かせ、また見も知らぬ繰るべく物、二人して引かせて、歌うたはせなどするを、めづらしくて笑ふ。

『枕草子』第九十五段

『宇津保物語』における用例(①)は、女一宮である仲忠の妻の出産にあたって、涼の中納言が祝い品を届ける場面を描いたものである。贈り物の中に「碁手こきてかさ高く入れたる」ものがあつたという。碁手とは一般的には勝負事の賭け物を指すが、ここでは銭そのものを表しているらしい。銭を貫く紐を抜き取り櫃に入れる様を、「扱く」を用いて表している。『枕草子』の用例(②)は、「五月の御精進のほど」に始まる章段中に見られる。清少納言は朋輩らと郊外へ赴く道すがら、高階明順邸で田舎風の歓待を受ける。明順は近隣の若い女らに稲を脱穀・精米させ、その様を見世物として供している。脱穀の様子を「扱く」と描写している。このように、散文作品では銭・稲といったかなり卑近な事物に動詞「扱く」を用いていることが確認される。

次に、和歌における用例を見てみよう。『新編国歌大観』『新編私家集大成』(古典ライブラリー)の語彙検索の結果に基づくと、単純動詞「扱く」の奈良時代の用例は無く、平安時代の和歌5首に用例が見出せる。ただし、諸本間に異同のない確実なものは2首(『伊勢物語』『斎宮女御集])に留まる。以下に示すのは『斎宮女御集』の該当箇所である。和歌と詞書の双方に「扱く」が用いられている⁴。

又、かの御方より、藤の花を朝な朝な扱き取らせ給ふことを、うがりけるを聞き給ひて

③朝ごとにうすとは聞けど藤の花こくこそいとど色まさりけれ

『斎宮女御集(西本願寺本)』148

③の歌は斎宮女御徽子(929-985)による作である。徽子の女房たちは「かの御方」側の人々が藤の花を扱き取ることを、常々不愉快に思っていた⁵。そのことを聞きつけた徽子は、扱くからこそ花の色が濃くなるのねと、動詞「扱く」を形容詞「濃し」に結び付け、相手の行いをたしなめるともなく指摘している。この用例をはじめとして、単純動詞「扱く」は少ないながらも和歌に詠まれている⁶。ただし、字書や散文作品の用例とは異なり、扱かれる対象物は桜・藤・梅な

⁴ 詞書の「扱き取らせ給ふ」には、諸本間に本文異同がある。「扱き取る」とあるのは西本願寺本のみで、それ以外の諸本では単純動詞「扱く」が用いられている。

⁵ 藤原登子、重明親王の継室。登子は後に村上天皇の後宮に入ったため、徽子方とは寵を奪い合う相手でもあった。

⁶ 本文中に例示していない4首の作品名とその箇所は以下の通り。歌または章段番号と、「扱く」対象物を併せ示す。『伊勢物語』六十二段・桜。『伊勢集(西本願寺本)』465・かにひの花。『赤染衛門集(榊原家本)』124・梅の花。『好忠集』379・茨。

どの和歌に相応しい景物である⁷。和歌では「扱く」は日常的労働を想起させない景物に限って用いるのである。

本章の最後に、単純動詞「扱く」の意味・用法を簡単にまとめておきたい。「扱く」は、『新撰字鏡』が成立した十世紀初頭にはすでに用いられており、給桑・脱穀などの際に葉や稲をもぎ取ること、あるいはそれに類似した動きを表す表現であった。また、「扱く」は日常生活に密接した表現であるため和歌に詠まれることは稀で、用いる場合は桜・藤・梅という和歌世界の美意識に沿った景物とともに詠まれる。なお、現存する文献の用例に基づくと、単純動詞「扱く」は、『万葉集』に用例のある「扱く+V」表現よりも遡ることができない。だが、合成語が単純語に先行して用いられていたとは考えがたい。また、単純動詞「扱く」によって表される養蚕や稲作は、日本では古くからおこなわれてきた生業である。よって、文献上には万葉時代の「扱く」の用例は見出せないが、生活に根ざした日常語として用いられてきたものと考えられる。

それでは次章では、奈良時代から平安時代の用例として、どのような「扱き+V」表現があるのかを概観し、和歌表現としての「扱き+V」の在り方に迫ってゆきたい。

3. 平安期和歌に見られる「扱き+V」表現

本稿の分析対象となる奈良時代から平安期までの用例として、「扱き入る」「扱き敷く」「扱き混ず」「扱き垂る」「扱き散らす」「扱き留む」「扱き下ろす」「扱き捨つ」「扱き立つ」の9種類が確認される。以下の《表》に『万葉集』と八代集への「扱き+V」表現の入集状況を示した。『金葉集』から『新古今集』にかけて用例がないため、省略している。表の末尾に、『万葉集』及び八代集への用例のない表現を示した。

《表》万葉集・八代集の「扱き+V」表現の入集状況(首)

	—入る	—敷く	—混ず	—垂る	—散らす
万葉集	5	2	0	0	0
古今集	1	0	1	2	2
後撰集	0	0	0	1	0
拾遺集	0	0	0	0	0
後拾遺集	0	0	1	0	0

※—留む 家持(家持集)

※—捨つ 俊頼(散木奇歌集)

※—立つ 俊頼(散木奇歌集)

※—下ろす 俊頼(散木奇歌集)・俊恵(林葉集)・実定(林下集)

⁷ 茨は和歌表現としては一般的ではないが、曾根好忠は「労働民の生活や卑近な素材にも着目」した異色の歌人であることに留意する必要がある。『和歌文学大事典』「好忠集」の項目参照。項目の執筆者は西山秀人氏、1252頁。

『万葉集』には「扱き入る」「扱き敷く」の2種類が7首に、『古今集』には「扱き入る」「扱き混ず」「扱き垂る」「扱き散らす」の4種類が6首に見られる。八代集の中では、『古今集』への入集が数量・種類ともに最も多いことがわかる。以下の④～⑨は、『古今集』中の「扱き+V」の全6例である。

花ざかりに京を見やりてよめる

④見渡せば柳桜を扱き混せて都ぞ春の錦なりける 春歌上・56・素性

北山に僧正遍昭とたけがりにまかれりけるによめる

⑤もみぢばは袖に扱き入れてもて出でなむ秋は限と見む人のため 秋歌下・309・素性

寛平御時后宮の歌合のうた

⑥明けぬとて帰る道には扱き垂れて雨も涙も降りそぼちつつ 恋歌三・639・藤原敏行

ぬのびきのたきにてよめる

⑦扱き散らす滝の白玉拾ひおきて世のうき時の涙にぞかる 雑歌上・922・在原行平

屏風の絵に詠み合せて書きける

⑧刈りて干す山田の稲の扱き垂れて鳴きこそ渡れ秋の憂ければ 雑歌下・932・坂上是則

冬のながうた

⑨～ 寒く日ごとに なりゆけば 玉の緒とけて 扱き散らし 霰乱れて 霜こほり いやかた
まれる 庭のおもに ～ 雑体・1005・凡河内躬恒

⑥は寛平元年(889)頃に催された「寛平御時后宮歌合」の際の歌であると詞書からわかるが、それ以外の歌は詠歌時期や詠出の場を具体的に想定することは難しい。ただ、行平・敏行・素性・躬恒といった歌人名を見ると、六歌仙から撰者時代に「扱き+V」が積極的に和歌に取り入れられていたことが推察される。また、『古今集』撰者がそのような歌を評価し入集させたことも明らかである。この状況は、単純動詞「扱く」が和歌に相応しくない表現として避けられていたことと対照的であると言えよう。

次章からは、「扱き+V」の中で最も古くから用いられている「扱き入る」と、最も浸透した「扱き混ず」を取り上げる。なにゆえこれらの表現が和歌に取り入れられたのか、また、どのように定着したのかを具体的に論じてゆくこととする。

4. 「扱き入る」について

「扱き+V」表現の中でも最も古くから用いられていたと考えられるのが「扱き入る」である。万葉集には異文注記の1例を含めて、5例が見出される。以下の⑩～⑭にこの用例を全て挙げた。うち4例が大伴家持(718-785)の作である。なお、紙幅の都合上題詞は省略した。また、「扱き入る」を用いた箇所について、『万葉集』諸本に特筆すべき異同は見られない。

⑩引き攀ぢて 折らば散るべみ 梅の花 袖に扱入れつ(袖尔古寸入津) 染まば染むとも

巻第8・1644「冬の雑歌」 *三野石守

⑪～ほととぎす 鳴く五月には 初花を 枝に手折りて 娘子らに つとも遣りみ 白たへの
袖にも扱入れ(蘇泥尔毛古伎礼) かぐはしみ 置きて枯らしみ～

巻第18・4111 *大伴家持、天平感宝元年(749) 閏五月二三日

⑫～鳴くほととぎす 立ち漏くと 羽触れに散らす 藤波の 花なつかしみ 引き攀ちて 袖に扱入れつ(袖尔古伎礼都) 染まば染むとも

巻第18・4192 *大伴家持、天平勝宝二年(750) 四月

⑬ほととぎす 鳴く羽触れにも 散りにけり 盛り過ぐらし 藤波の花

一に云ふ「散りぬべみ袖に扱き入れつ(袖尔古伎納都) 藤波の花」

巻第18・4193 *大伴家持、天平勝宝二年(750) 四月

⑭池水に 影さへ見えて 咲きにほふ あしびの花を 袖に扱入れな(蘇耳尔古伎礼奈)

巻第20・4512 *大伴家持、天平宝字二年(758) 二月

以上に示した用例は、いずれも枝や茎に付いた花をしごくようにむしり取って袖に入れることを詠む。最も古い三野石守(生没年未詳)の例(⑩)は、梅は折ると散ってしまうので袖に入れて愛でようではないかと詠んでいる。石守歌(⑩)の下句と、家持の長歌(⑫)の末尾は、扱き落とす花の種類こそ違え、構造は全く同一である。これは、諸注釈書にも指摘されているように、家持が石守歌の表現を意識的に取り込んだためと考えられる⁸。家持は藤のほか、橘(⑪)・馬酔木(⑭)についても用いており、表現としての可能性を探りつつ「扱き入る」を詠み込んでいたと思われる。また、家持はこれら4例を「袖に扱き入る」と詠んでおり、この形が定型表現として家持の中で確立していたと考えられる。

万葉歌に続く用例として、以下の素性(??-910)の歌が挙げられる。

北山に僧正遍昭とたけがりにまかれりけるによめる

⑮もみぢばは袖に扱き入れてもていでなむ秋は限と見む人のため

古今・秋歌下・309・素性

ここでは、花ではなく紅葉を「扱き入る」と詠んでいる。素性の父遍昭が没したのは寛平二年(890)一月であることから、詠歌時期は寛平元年以前の秋である。よみ人知らず・六歌仙時代の和歌には「扱き入る」は見られず、家持歌と素性歌の間には一世紀以上の隔絶がある⁹。現存する和歌に拠る限り、家持以後は「扱き入る」に着目する歌人は素性まで現れなかったということになる。とはいえ、素性もまた「袖に扱き入る」と『万葉集』と同様の型で詠んでおり、万葉以来の表現の流れを汲んでいることは間違いないと言えよう。

素性歌に続く用例としては寂蓮(1139頃-1202)の「結題百首」(文治三年[1187])の「まつがねのたけがり行けばもみぢばを袖に扱き入る山おろしの風」(86)まで下る¹⁰。素性歌の『古今集』入集により、「扱き入る」は和歌表現として広く認知されていたはずであるが、素性歌以

⁸ 家持歌(⑫)は石守歌(⑩)の焼き直しであると批判されることが多かった。一方、鉄野昌弘氏は「初夏の花である当該歌の藤は、季節の移ろいを象徴する花として惜しまれている」と、家持の意図を評している(鉄野昌弘(2007)『大伴家持「歌日誌」論考』、21頁)。

⁹ 他の「扱き+V」表現も、よみ人知らず・六歌仙時代の用例はわずかである。確実なものとして挙げられるのは『古今集』(在原行平・992)所収の「扱き散らす」(⑦)のみである。

¹⁰ 新編国歌大観・新編私家集大成(古典ライブラリー)の検索によると、寂蓮以降の鎌倉時代の「扱き入る」の用例として7首に見える。それらはいずれも紅葉について詠んだものであり、素性歌の影響の大きさがうかがえる。

後しばらく顧みられていなかったらしい。ともあれ、素性歌の「扱き入る」は古今集時代の「扱き+V」表現の中でも特に早いものの一つである。素性歌は「扱き入る」をはじめとした諸表現の盛行のきっかけとなったとすることができるだろう。

ここまで、『万葉集』以来の表現として、「扱き入る」の意味と用法を確認してきた。単純動詞のように稲・桑・有孔銭貨が取り上げられてはいない。ただし、人が花や紅葉を手で摘み取り袖に入れるという動作は、稲穂や桑の葉をしごき落とす動きに類似している。すなわち、単純動詞「扱く」の本来の意味を念頭に置いた上で「扱き入る」を和歌に用いたと考えられる。

その一方で、『万葉集』中のもう一つの「扱き+V」表現である「扱き敷く」の用法には、興味深い特徴がある。

⑩秋風の 吹き扱き敷ける(布伎古吉之家流) 花の庭 清き月夜に 見れど飽かぬかも

巻第20・4453 *大伴家持、天平勝宝七年(755)八月十三日

家持は、花が庭一面に散り敷くさまを「(吹き)扱き敷く」と詠み表している。「扱く」動作の主体は人間ではなく秋風である。前項動詞「扱く」が後項動詞「敷く」を修飾して比喩的に働いているのである。この例からは、「扱き+V」が、視覚的情景を客観的に描写するための表現としての余地があると感じさせる。「扱き敷く」は⑩の用例以外には、『万葉集』にもそれ以後の和歌にも見出せない¹¹。とはいえ、前項動詞「扱く」が後項動詞を修飾する「扱き+V」表現は、六歌仙時代や古今集撰集期の和歌にも複数見出される。用例⑥・⑧として示した「扱き垂る」や、用例⑦・⑨として示した「扱き散らす」がそれに相当する。このようなことから、家持が「秋風の吹き扱き敷ける」と詠んだ8世紀半ばには、古今集撰集期の「扱き+V」表現流行の萌芽が既にあったと見ることも可能だと言えよう。

次章では、最も広く受け入れられた「扱き混ず」を取り上げて、和歌表現としての「扱き+V」のあり方により迫ってゆきたい。

5. 「扱き混ず」について

本章では、平安時代に最も浸透した「扱き+V」表現といえる「扱き混ず」を取り上げる。「扱き混ず」の用例として最も古いものの一つが、『古今集』の素性歌である。

花ざかりに京を見やりて詠める

④見渡せば柳桜を扱き混ぜて都ぞ春の錦なりける 春歌上・56・素性

当歌の詠歌時期は明確ではないが、『古今集』成立の延喜五年(905)以前の作であることは間違いない。当歌は、ある程度離れた位置から柳と桜に彩られた都の春景を見て、その様を錦に見立てて比喩的に賛美したものである。この歌では単純動詞「扱く」や「扱き入る」のように、実

¹¹ 「後冷泉天皇大嘗会主基方倭歌」(永承元年[1046]・藤原家経)に「岩根扱き敷く」の用例がある。ただし、これは『万葉集』の「石根許其思美」(巻3・414)や「磐根己凝敷」(巻7・1130)を平安期に「いはねこきしみ」「いわねこきしく」と訓み慣わしていたことに基づくものである。現在、これらは「こごしみ」「こごしき」と訓むと考えられている。よって、「岩根扱き敷く」と詠む平安期以降の用例について、本稿では「扱き敷く」の用例として認めなかった。

際に何かは扱き落とされる様を詠じているわけではない。そのこともあって、動詞「扱く」の格関係までも不明瞭になりつつある。

延喜年間には素性以外にも多くの歌人が「扱き混ず」を用いている。詠みぶりや構造には類似点があり、この時期に「扱き混ず」が和歌表現として流行していたことをうかがわせる。詠出時期の明らかな例として、平定文(??-923)が延喜六年(906)に開催した「左兵衛佐定文歌合」における次の歌がある。

緑沼紅蓮浮

⑰紅のはちす浮かべる緑沼に白波たてば扱き混ぜの花 7・作者未詳

当例は句題「緑沼紅蓮浮」に基づいて詠んだものである。素性歌と同様に色彩に着目しており、紅色の蓮の咲く緑沼に白波が立つ様は「扱き混ぜの花」のようだと表現している。上の句は句題をなぞったに過ぎず、表現としての目新しさには乏しい。ただ、素性が「扱き混ず」で表すのは広がりのある風景であるのに対して、当歌は沼の中に着目している。よって、当歌は素性歌と異なる視点で「扱き混ず」を詠むことを試みたものではなかったかと思われる。

次に、「紀師匠曲水宴和歌」の用例を見る。貫之を師匠と目する歌人7名が参集し、曲水宴の席上で詠んだものである。歌人らが皆京に在った、昌泰年間(898-901)、延喜二・三・七年(902・903・907)のいずれかの催しとされている。

花浮春水

⑱春なれば梅に桜を扱き混ぜて流す水無瀬の川の香ぞする 22・紀貫之

梅と桜を混ぜ合わせながら流している水無瀬川は、川がまるで香っているようだと詠む。当歌と素性歌を比較すると、春の植物を二種取り上げる点、それらが混ざり合わさった様に春の美を見出す点に類似が見いだせる。また上の句の構造も酷似している。どちらを早い例と見なすのか判断は難しいが、両者に影響関係があることは間違いないであろう。

延喜の終わり近くに催された「京極御息所歌合」では、三首に「扱き混ず」が用いられている。

⑲ちはやぶる春日の原に扱き混ぜて花とも見ゆる神のきねかな 10・凡河内躬恒

⑳みゆきふる春日の山の桜花えこそ見分かね扱き混ぜにして 58・藤原忠房

㉑消えぬをぞ花と知るべき扱き混ぜてみゆきのみふる山の桜は 60・褒子女房

延喜二十一年(921)三月七日、宇多上皇と御息所褒子は大和国の春日社に参詣する。その際、大和守藤原忠房が褒子に和歌二十首を献上する。後日、褒子らはこの忠房の二十首を本歌に据えて、それらに二首ずつを返歌として詠み加え、さらには末尾に四首の恋歌を添えて、計六十四首から成る歌合の形態に整えた。これが本歌合である。⑲・⑳は本歌、㉑は返歌に相当する。⑲は躬恒による代作詠である。⑳・㉑では、「御幸」と「雪」の掛詞によって、桜・都人・雪という三つのイメージが重ね合わされている。忠房(⑳)は、これらの外見上の類似点に着目し、春日山では桜・都人・雪が「扱き混ぜ」の状態にあって、見分けがつかないと詠む。一方、褒子女房の詠(㉑)ではそれぞれの相違点に着目している。桜と雪は色味・散り様は見まちがえるほどであるが、雪は春が来ると消えてしまう上に旅人である都人も時が過ぎれば去ってしまう。最終的に残るのは桜だけなのですと、いささか取り澄まし顔で褒子側の女房は詠んでいるのである。

ここまでに取り上げた延喜年間に詠まれた用例(④、⑰～㉑)からは、植物・装束・雪など様々なものが「扱き混ず」と詠み表わされていることが確認できる。絢爛たる色彩美を詠む場合もあれば、複数のものが渾然一体となった様や、類似したものの見分けがつかない様を詠むこともある。この当時、歌人たちは、「扱き混ず」がどのような情景を描写し得るのかを探りつつ詠んでいたとみることができよう。

ただし、現存する和歌に依る限り、このような歌人たちの試みは延喜以降徐々に減少する。次に示す2首は、十世紀半ば頃の和歌に見いだされる数少ない「扱き混ず」の用例である。

⑲扱き混ぜて涙も雨も降りつるにいづれによりて君止まるらん 中務集・96

⑳ほのぼのと天の戸わたりあけたれば扱き混ぜなりや四方の玉垣 海人手古良集・29

㉑の中務(912頃-989頃)は、形状の似た雨と涙が緋い交ぜになった様を「扱き混ず」と表し、藤原師氏(913-970)は、秋の社頭の玉垣の有様を「扱き混ず」と詠んでいる。

以上に挙げた延喜年間から十世紀半ば頃までの用例を見ると、「扱き混ず」は主に視覚的効果を狙った表現として様々な事柄・情景を表出するために和歌に取り入れられていることがわかる。単純動詞のようにもぎ取る具体的動作を表すわけではない。ただし、いずれも扱いて混ぜ合わせたようだと比喩的に表すものであって、前項動詞「扱く」の本来の意味はある程度は保存されている。この当時の歌人たちは「扱く」の持つ意味を念頭に置きつつ、「扱き混ず」の和歌表現としての可能性を探っていたということが出来る。

十世紀半ばを過ぎると「扱き混ず」の意味と用法は固定化してゆく。これは、「扱き混ず」を用いた和歌のうち、素性歌のみが『古今集』に入集したことが影響したと思われる。古今入集歌がオーソリティとしての地位を得たことで、「扱き混ず」は素性歌を想起させる表現になったということである。その証拠として、この頃から素性歌を本歌とした例が目立つようになる。

㉒扱き混ぜの花の錦を春風にたちきて里へ帰るかりがね 保憲女集 16

㉓小萩原柳桜を扱き混ぜし春の錦もしかじとぞ思ふ 清輔集・107

その作例として最も早いものの一つに、㉒の賀茂保憲女(生没年未詳、歌人としての活躍期は十世紀後半)の歌がある。ここでは、雁が北方に帰るために春風に乗って飛んでいるさまを、錦を裁つようだと例えている。和歌には、扱き混ず・花・錦という表現が含まれていることから、都の春を錦に例える素性歌を念頭に置いていることは明らかである。賀茂保憲女は人々の共通認識となっていた素性歌のイメージを「扱き混ず」を通して借用することで、洛内にいる視点人物が北へ帰る雁を見ている様が、自然と想起されるようになっているのである。㉓として示した藤原清輔(1108～1177)の歌も、素性歌を本歌としたものである。萩が咲き乱れる秋の野原の美しさを示すために、素性歌を持ち出し比較している。これらの歌は、春景の美を表す典型として素性歌が位置していたからこそ、詠み出されたと言いうことができるのである。

このように、十世紀半ば過ぎから十二世紀末頃まで、「扱き混ず」を用いた歌の大部分は素性歌「見渡せば柳桜を扱き混せて」を念頭に置いたものであった¹²。これらの歌はいずれも素性歌の枠組を強く意識して詠まれている。歌人たちが「扱き混ず」によって表しうる新たな情景を探し出そうとしていた延喜年間の流行期とは状況が異なっている。この要因の一つに、三代集に素性歌以外の「扱き混ず」を用いた和歌が収められなかったことがある。『古今集』に収められた素性歌の詠みぶりが、詠歌の際の「扱き混ず」のあるべき姿として享受され定着したのである。このようにして、「扱き混ず」は「動詞連用形+動詞」の形態を取った単なる表現ではなく、歌ことばと同様の「本意(ものの美的本性。そのものの最もそれらしいありかた)」を持つ表現に昇華したといえるのである¹³。

6. むすびにかえて——歌ことばと複合動詞

本稿では、単純動詞「扱く」および複合動詞「扱き入る」「扱き混ず」の和歌における用例を分析することによって、その意味と用法の展開を論じてきた。その結果、以下の点が明らかとなった。まず、六歌仙から古今集撰者時代に「扱き+V」表現の流行があったことである。特に、本稿で取り上げた「扱き入る」と「扱き混ず」については、いずれも素性の「もみちばは袖に扱き入れてもて出でなむ秋は限と見む人のため」(⑤)と「見渡せば柳桜を扱き混せて都ぞ春の錦なりける」(④)が『古今集』に入集したことで、これらの詠みぶりが和歌における典型的用法と見なされるようになる。中でも、「扱き混ず」は十世紀終わり頃から、素性歌の詠みぶりを「本意」とした和歌が多く詠まれたことが確認される。「扱き+V」の中には、勅撰集への入集をきっかけに歌ことばにきわめて近い表現として定着したものがあつたと言えよう。

ここで、最後に「複合動詞」を論じるにあたって避けては通れない事柄を取り上げておきたい。それは、奈良・平安期の和歌に見える「扱き入る」や「扱き混ず」を、現代日本語の複合動詞と同一のものと見なしうるのかということである。現代語の複合動詞は前項と後項が密接に結びついた一つの「語」とみなされることが多い。しかし、古代語では前項と後項の間に助詞がおかれる表現や、前項と後項が入れ替え可能な表現が多数見られることから、「一語になりきっていない」と言われることもある。青木博史氏はこのような古代日本語と現代日本語の「動詞連用形+動詞」の振る舞いの違いを、統語的に解釈しようと試みている¹⁴。青木氏は現代語と古代語の

¹² 十二世紀中頃から、新古今歌人が新たな詠風・表現の試みを試みはじめる。「扱き混ず」も、「嵐吹く木の葉扱き混ぜ 雲降る寂しかりける山の奥かな」(六百番歌合・518)、「秋の色も今は嵐の山風に紅葉扱き混ぜ時雨落つなり」(千五百番歌合・1693)のような、霰・雨を交えつつ嵐が木の葉を激しく吹き乱す様を表現した用例が散見されるようになる。

¹³ 本稿では取り上げていないが、平安期の物語にも「扱き混ず」の用例が見出せる。特に『源氏物語』では4例中3例が花の名の色目の装束・男性の袍の色・着飾った女性の様子を、視点人物が見わたす場面に用いられている。物語にも、和歌を通して成立・展開した「扱き混ず」が取り入れられたらしい。

¹⁴ 青木博史(2013)「複合動詞の歴史の変遷」参照。現代語複合動詞については、影山太郎(1993)『文法と語形成』以降、語彙的複合動詞(各項が意味を保持したまま強く接続し、統語上[文法上]一語となっているもの)と統語的複合動詞(後項が文法的機能を担っているもの)の二つに分類することが広く受け入れられている。青木氏の論考は現代語とは異なる古代語の複合動詞の振る舞いを、統語論の観点から通時的に捉えようとしたものと言える。

VV 型複合動詞（前項が接頭辞化したり後項が補助動詞化したりしていないもの。主題関係動詞とも）の句構造を次のように説明している¹⁵。

現代語 VV 型複合動詞：vp[項+[V1V2]]

古代語 VV 型複合動詞：vp[vp[項+V1]V2]

現代語では前項動詞（V1）と後項動詞（V2）が直接結びついて一語化して一つの動詞となり、それが共通する一つの項（ヲ格・ニ格など）を取っている。一方、古代語では前項動詞と後項動詞は直接結びつくのではなく、前項動詞を含む動詞フレーズ（vp[項+V1]）に後項動詞（V2）が接続しているという。青木氏は古代日本語の「動詞連用形+動詞」表現は、連用形の「句を作る」機能に基づいて形作られたフレーズの一部だと見ている。そして、このような古代語複合動詞が現代語のあり方に変化したのは、動詞テ形の句の作る機能が強まった頃、すなわち中世室町期であろうと青木氏は見ている。

この説に基づくと、奈良・平安期和歌に用いられる「扱き+V」についても V1V2 に相当する「扱き入る」「扱き散らす」「扱き垂る」部分のみを切り取って論じることは避けねばなるまい。中世室町期以前の「動詞連用形+動詞」は、文法的・統語的には動詞フレーズの一部であったからである。本稿でここまで論じてきたように、和歌に見える「動詞連用形+動詞」表現の中には、「扱き混ず」のように本意を獲得し、現代語の VV 型複合動詞のように語彙的な性質をある程度備えたものが存在したことも事実である。その一方で、「扱き+V」表現が和歌に持ち込まれて未だ本意が固まっていない頃——「扱き+V」表現の可能性を歌人らが探っていた六歌仙・古今集撰者時代——には、歌人ら自身もこの表現をひとまとまりのものとして認識していなかった可能性を想定しなければならないだろう。

「扱き入る」「扱き混ず」を用いた和歌が勅撰集への入集を果たし、その和歌の用法こそが「扱き入る」「扱き混ず」のあるべき姿だと認識されるようになる。このような過程を経て和歌に用いられるようになった表現については、語彙的にあたかも一語であるかのように歌人たちに認識されていたのではあるまいか。百留康晴氏にも、歌人たちが和歌を詠み継ぐ中で複合動詞として認識された「動詞連用形+動詞」表現が存在した可能性を指摘した論考がある¹⁶。百留氏はこのことの証左として、『万葉集』の類歌・類同歌句の中に多くの「複合動詞」が含まれることを挙げている。百留氏が万葉集の類歌や類同歌句に見られる複合動詞の例として「落ち滾つ」「打ち曝し因り来」「見渡す」「行き触る」「引き扱つ」「恋ひ暮らす」「生ひ及く」「行き過ぎかぬ」「散り過ぐ」などを挙げて次のように結論づけている。

¹⁵ 注 14 青木氏論文参照。なお、本稿では補助動詞型複合動詞（Vs 型、アスペクト複合動詞とも）については取り上げていない。青木氏によると古代語において VV 型と Vs 型は同じ句構造を持っていたが、その後の歴史的展開の中で徐々に前項と後項の結び付きが強まり、現代語の VV 型複合動詞が形成されたとしている。

¹⁶ 百留康晴（2020a）「万葉集における類歌と複合動詞形成—動詞「過ぐ」を中心に—」、百留康晴（2020b）「日本語複合動詞の発生史について」。

上代に見られる複合動詞は(中略)その場限りで結びつき、特定のカテゴリーを形成することはない。しかし当時の複合動詞は何らかの背景の下でカテゴリーを形成していたからこそ容易に解消されず、後代に受け継がれ、使用され続けたのである¹⁷。

上記の引用部に下線を付した「上代」と「何らかの背景の下で」の箇所を、それぞれ、「平安・鎌倉時代」と「歌ことば」としての本意を獲得することで、本稿における論者の主張と概ね一致しており、論者の方向性とも近似している。ただし、類歌・類同歌句として示す表現の中には、前項後項ともに本来の意味を保持しているVV型だけでなく、一部が補助動詞化している表現(「見渡す」「行き過ぎかぬ」)や、接頭辞化している表現(「打ち曝し因り来」)が含まれており、これらをひとまとめに論じてよいのかという問題が残る。また、これらの表現を「歌ことば」として見るのであれば、後代の歌人がどのように和歌に取り込んだのか、という和歌文学的観点からの検証も不可欠であろう。

ともあれ、奈良時代から平安時代にかけての和歌に見られる「動詞連用形+動詞」を取り上げて「歌ことば」としての生成と展開の様相を解明することは、複合動詞の発生の様相の一端を垣間見ることにつながると言える。複合動詞の語形成と歌ことばの生成には深い影響関係があることをふまえ、日本語学と和歌文学の両側面から複眼的に分析することが求められるのである。

引用本文

本文中における引用は以下に拠った。以下に示したものを以外はすべて『新編国家大観』(古典ライブラリー)に拠っている。一部表記を改めた箇所がある。

日本書紀・宇津保物語・枕草子・伊勢物語：『新編日本古典文学全集』(ジャパナレッジ、
<https://japanknowledge.com/>)

万葉集：『万葉集訳文篇』(塙書房、1972年)、『万葉集本文篇補訂版』(塙書房、1998年)

左兵衛佐定文歌合：萩谷朴『平安朝歌合大成 新訂増補 一』(同朋社、1995年)

参考文献

伊藤博(1976)「万葉集と歌語」『万葉集の表現と方法 下』、塙書房、301~318頁

影山太郎(1999)「V-V型複合動詞」『文法と語形成』、ひつじ書房、74~177頁

片桐洋一(1999)『歌枕歌ことば辞典 増訂版』、笠間書房

神谷かをる(1999)「複合動詞」『古今和歌集用語の語彙的研究』、和泉書院、135~148頁(初出：「古今集の語彙—複合動詞を中心に—」『光華女子大学研究紀要』34、1996年12月)

久保田淳・馬場あき子(1999)『歌ことば歌枕大辞典』、角川書店

小島聡子(2001)「平安時代の複合動詞」『日本語学』20(8)、明治書院、71~78頁

鉄野昌弘(2007)『大伴家持「歌日誌」論考』、塙書房

青木博史(2013)「複合動詞の歴史的変遷」『複合動詞研究の最先端』、ひつじ書房、215~241頁

¹⁷ 百留康晴(2020a)「日本語複合動詞の発生史について」528(63)頁参照。下線は論者が付したものである。

- 和歌文学大事典編集委員会(2014)『和歌文学大事典』、株式会社古典ライブラリー
- 糸井通浩(2018)「かな散文と和歌表現—発想・表現の位相」『古代文学言語の研究』、和泉書院、338～365頁(初出:『和歌と物語(和歌文学論集3)』風間書房、1993年)
- 百留康晴(2020a)「万葉集における類歌と複合動詞形成—動詞「過ぐ」を中心に—」『国語教育論叢』27、島根大学教育学部国文学会、59～71頁
- 百留康晴(2020a)「日本語複合動詞の発生史について」『国語学研究』59、「国語学研究」刊行会、537(54)～526(65)頁

附記

本稿は2022年度台湾日本語学会国際学術シンポジウム(2022年12月10日、於東呉大學外雙溪キャンパス)における口頭発表「歌ことばとしての複合動詞—「扱き混ず」を中心に—」を元にしたものです。6章は成稿あたって大幅に加筆しました。席上にて貴重な助言をいただいた方々に厚く御礼を申し上げます。また、本研究はJSPS科研費JP19K13057の助成を受けた成果の一部です。